

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：82621

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720086

研究課題名(和文) 1900 - 30年代フランスの美術と建築における軸測投影に関する総合的研究

研究課題名(英文) Axonometric projection in Art and Architecture in France from 1900's to 1930's

研究代表者

米田 尚輝 (YONEDA, NAOKI)

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・その他部局等・研究員

研究者番号：50601019

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1900 - 30年代にかけての西ヨーロッパの美術と建築における、遠近法の描き方のひとつである軸測投影(axonometric projection)の影響を検証するものである。主たる考察の対象としたのは、ル・コルビュジエ(1887-1965)、ピート・モンドリアン(1872-1944)、テオ・ファン・ドゥースブルフ(1883-1931)、ゾフィー・トイパー(1889-1943)らの仕事である。本研究は、工法的視点から発展した軸測投影が内包する美的効果が、これら前衛芸術家たちの芸術営為に反映されていることを明示した。

研究成果の概要(英文)：The study aimed to reconsider the intervention of the axonometric projection, a way of the drawing of perspective, appeared in art and architecture in Western Europe from 1900's to 1930's. The main subjects of the research are, Le Corbusier (1887-1965), Piet Mondrian(1872-1944), Theo van Doesburg (1883-1931) and Sophie Taeuber-Arp (1889-1943). The research has achieved to verify that the aesthetic effect of axonometric projection, which developed from the tectonic way of seeing, influenced the works of these avant-garde artists and architects of the era.

研究分野：美術史、表象文化論

キーワード：美術 建築 表象文化論 アヴァンギャルド モダニズム 現代美術

1. 研究開始当初の背景

本研究は、遠近法の描き方のひとつである軸測投影(axonometric projection)の来歴を遡り、その美的性格が1900-1930年代フランスの美術と建築に与えた影響を考察するものである。分析の主たる対象としたのは、フランスで活躍したスイスの建築家ル・コルビュジエ(1887-1965)と、オランダの美術家集団デ・ステイルの主導者テオ・ファン・ドゥースブルフ(1883-1931)である。

建築、絵画、デザイン等の多様な表現形式において展開した二人の芸術営為には、フランスの建築技師オーギュスト・ショワジー(1841-1909)に由来する軸測投影のグラフィカルな特性が潜在していると考えたからである。とりわけ1920-30年代にかけて、ル・コルビュジエとファン・ドゥースブルフをはじめ、ピート・モンドリアン(1872-1944)やゾフィー・トイバー(1889-1943)ら近代の建築家や美術家たちの仕事に、時期を同じくして軸測投影が現れてきたことに着目した。

ル・コルビュジエは、ファン・ドゥースブルフが画商レオンス・ロザンベールを通じて企画した、1923年にパリで開催されたデ・ステイルの展覧会で彼らの活動を目にしていく。ル・コルビュジエが「エスプリ・ヌーヴォー」誌に寄せているこの展覧会に関する記事が示しているように、共有する関心は軸測投影の使用にあった。他方、デ・ステイルのグループ内部において、ファン・ドゥースブルフとモンドリアンの論争は、一般的には絵画における斜線の導入を巡るものであったが、実のところ、これは軸測投影が孕む特性と関連していたと考えるに至った。

また、資料収集ならびに作品調査のため、ニューヨーク近代美術館(ニューヨーク)、ル・コルビュジエ財団(パリ)、アルプ財団(パリ)への訪問を考えていた。

2. 研究の目的

(1)

本研究の目的は、遠近法のひとつである軸測投影の来歴を建築史の文脈において美学的側面を重視しつつ18世紀から20世紀初頭にいたるまで追跡すること、そしてその美的効果が1900-1930年代の西欧の美術と建築における近代性の成立に寄与した射程を見極めることである。ル・コルビュジエの建築および絵画の仕事を、同時期に勃興していた前衛芸術運動、とりわけフランスのキュビズムとオランダのデ・ステイルとの関連のうちで位置づけ直すこと。この作業によって、これまで地域的な理由からその親近性が論じられることのなかった、ル・コルビュジエとデ・ステイルが共有していた問題をとりだすことができる考えた。

(2)

二番目の目的は、ピート・モンドリアンおよびテオ・ファン・ドゥースブルフの1910-1920年代を中心とした絵画作品における、軸測投影の現れ方を検証することである。先行研究において、デ・ステイルという芸術運動に参加していた二人の関係は、絵画における美的価値基準の相違によって袂を分かったと考えられてきた。しかしながら、そこには絵画と建築という諸芸術ジャンル優位論の議論が介入しており、その要点にあるのが軸測投影の効果であることを提示することを目的とした。

(3)

最後の目的は、フランスで活躍したスイス出身の美術家ゾフィー・トイバーの1910-20年代の仕事における、軸測投影の役割を検証することである。トイバーは、ダダの芸術家として、ダンス、劇場用のマリオンネット、テキスタイルなど、絵画・彫刻といった当時では諸芸術ジャンルにおいて上位に置かれていた芸術ではなく、「周縁的」な芸術ジャンルにおいて活躍していたと考えられてきた。しかしながら、トイバーの仕事はこうした多様なジャンルにおいても、ひとつの芸術原理が通底していることを示すべく、軸測投影という観点から俯瞰的に考察することを目的とした。

3. 研究の方法

(1)

1920-30年代のル・コルビュジエとファン・ドゥースブルフの活動を調査した。これまでの研究によって、ル・コルビュジエが、オーギュスト・ショワジーに由来する軸測投影を強く参照していたことは明らかになっていた。しかしながら、先行研究ではル・コルビュジエがデ・ステイルと接触していた事実は看過されていた。本研究は、この事実を重要視して、軸測投影の美的効果がどのようなかたちで20世紀初頭の前衛に影響を与えたのかを検証することで、この時期の諸芸術に通底するひとつの芸術原理を明確にすることができると考えた。そしてこの方法は、フランス、オランダ、スイスという異なる地域において同時期に現れたひとつの傾向を示すことができると考えた。

(2)

1923年に画商レオンス・ロザンベールによってパリのエフォール・モデルヌ画廊で「デ・ステイルの建築家たち(オランダ)」展を中心に調査を進めた。この展覧会は、1917年からオランダで活動していた美術家集団デ・ステイルがフランスの公衆へ広く紹介される契機となったという点、そしてそこで展示された作品群が軸測投影の影響を強く帯びていたという点で重要である。とりわけ、モン

ドリアンとファン・ドゥースブルフによる斜線に関する議論において、軸測投影が果たしていた役割を検証した。こうすることで、ファン・ドゥースブルフとモンドリアンとの論争において焦点となっていた斜線の導入について、新たな視点を導入することができる考えた。

(3)

ダダ運動の文脈において扱われることので多かったゾフィー・トイバーの仕事进行调查し、これまでの研究においては言及されることが少なかった建築の活動を重点的に考察した。というのも、トイバーにおける建築から派生した軸測投影の使用は、彼女の多様な仕事に通底する芸術原理を要約するものとして考えられるからである。トイバーの仕事はそのジャンルが多岐にわたるがゆえ、諸ジャンルにおける個別の研究が盛んに行われてきたが、軸測投影という視点を導入することでトイバーの営みを俯瞰的に検証できると考えた。

4. 研究成果

(1)

オーギュスト・ショワジエの著作『建築史』(1899年)を中心に、そこに図版として挿し込まれていた軸測投影の使用方法を分析し、1920年代のモダニズムの美術と建築におけるその適用を検証した。ル・コルビュジエは著作『ある建築へ』(1923年)の中に、ショワジエによるハギア・ソフィアの軸測投影図を掲載していた。その頃にル・コルビュジエが手がけていたプロジェクト「ペサックの集合住宅」(1924)に軸測投影が用いられていたことから、彼がこの描き方に関心を示していたことが理解できる。他方、ファン・ドゥースブルフもまた、コーネリアス・ファン・エーステレン(1897-1988)を経由して軸測投影に関心を寄せており、その傾向は3つの住宅プロジェクトに強く反映されている。こうした背景から、1920年代のフランスでル・コルビュジエとファン・ドゥースブルフが共に軸測投影を問題提起していたことは、論文「軸測投影の来歴と1920年代フランスの前衛——オーギュスト・ショワジエ、ル・コルビュジエ、テオ・ファン・ドゥースブルフ」に結実している。

(2)

オランダの芸術運動デ・スタイルにおける、ファン・ドゥースブルフとモンドリアンとのあいだでの、芸術ジャンル優位論における軸測投影の影響を検証した。まず、モンドリアン初期作品として知られている、樹木ないしは埠頭を描いたシリーズから、徐々に抽象へと至る道筋を丹念に追跡した。これは、ニューヨーク近代美術館で開催された展覧会「Inventing Abstraction, 1910-1925」(2013)に

おいて示された、20世紀初頭の抽象絵画の展開の図式に大きな示唆をうけている。これを踏まえて本研究では、モンドリアンのキュビスム期と括られる時期の絵画作品から、抽象へと移行する過程を精緻に追跡しつつ、軸測投影の問題へと接続した。「デ・スタイルの建築家たち(オランダ)」展に出品されたデ・スタイルの建築にまつわる図面や模型などを主たる考察の対象として、モンドリアンとファン・ドゥースブルフの絵画における軸測投影の介入の意義を分析した。以上の成果は、論文「モンドリアンとファン・ドゥースブルフのグラフィック・イメージ」としてまとめた。

(3)

ゾフィー・トイバーの活動のなかでも関連性が低いと考えられてきたダンスと建築に着目し、これらに共通する芸術原理を軸測投影の役割に沿いつつ考察した。トイバーが、ダダのタベにおいて、ダンサーとして幾度か参加していたことは明らかになっていたが、そのダンスがいかなるものであったのかは、資料の欠落からこれまで論じられることがなかった。そこ本研究では、トイバーがダンス教育において師事していた振付家ルドルフ・フォン・ラバン(1879-1958)のダンス理論にもとづいて、トイバーのダンスを考察した。この考察は、論文「ゾフィー・トイバー——1910-20年代のデザイン理論」にまとめられた。本論文では、トイバーの仕事におけるラバンのダンス理論が、ダンスそのもののみならず、潜在的に絵画や建築といった造形作品においても反映されていることを指摘した。すなわち、トイバーにおけるダンスと建築という異なる表現形式のなかに、軸測投影の効果から派生する知覚様態が一貫して通底していることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

米田尚輝、ゾフィー・トイバー——1910-20年代のデザイン理論、NACT Review 国立新美術館研究紀要、査読有、第1号、2014、10-21

米田尚輝、モンドリアンとファン・ドゥースブルフのグラフィック・イメージ、引込線 2013、査読無、2013、207-218

米田尚輝、軸測投影の来歴と1920年代フランスの前衛——オーギュスト・ショワジエ、ル・コルビュジエ、テオ・ファン・ドゥースブルフ、PHASES フェーズ、査読無、第3号、2012、50-57

6. 研究組織

(1)研究代表者
米田 尚輝 (YONEDA NAOKI)
東京国立近代美術館・研究員
研究者番号：50601019